



OSAKA JAPAN

..... 国際ロータリー第2660地区 ■吹田江坂ロータリークラブ.....

# SUITA ESAKA ROTARY CLUB

## CLUB WEEKLY BULLETIN

創立年月日 / 1990.2.27  
事務所 / 〒564-0063 吹田市江坂町1丁目23番101号(大同生命江坂ビル12F)  
TEL06(6821)0222 FAX06(6821)0206 E-mail:esaka-rc@lake.ocn.ne.jp

例会場 / 新大阪江坂 東急イン・3F 〒564-0051 吹田市豊津町9番6号 TEL06(6338)0109 例会日 / 毎週火曜日 12:30~13:30  
会長:水谷善博 幹事:延秀恵 会報委員長:内田正

### 2010年7月27日 第961回例会(第960号)

#### 本日の例会

今週の歌 「それこそロータリー」  
卓話 「ロータリー(2年、これから)と仕事」  
成松重人 会員

#### 次回例会のお知らせ(8月7日)

「夏の家族会」

#### 前回〔7月20日〕例会記録

##### 来客

依田悠介君(国際親善奨学生)  
阪口章吾君(関西大学RAC会長)  
木村悠太郎君( " 幹事)

##### 会長の時間

水谷 会長

梅雨末期のゲリラ豪雨による各地の災害に広島、島根、岐阜、群馬各県で死者、行方不明者が多数出て、今年の梅雨も土曜日に明けた模様です。地球温暖化の影響からか、今までに経験しなかった降水量によるものでした。日曜日に、庄瀬様、西山様達8名で高野山町石道ハイクに行ってきた。聖地高野山への表参道で、弘法大使が高野山を開山して以来の信仰の道とされてきた道です。根本大塔を起点に、ふもとの慈尊院まで180基高さ3mの五輪の塔形の石柱が、鎌倉時代に建立されたまま、今なお昔の面影を残しています。180の町石を数えながら、

##### 出席報告

田畑 委員長

##### 【7月20日】

在籍会員 42名(内出席規定適用免除者 10名)  
出席会員 34名(内出席規定適用免除者 7名)  
ホームクラブ出席率 87.18%

6月29日のMUを含む出席率 92.31%

約21.5km約7時間のコースでした。朝8時30分に九度山駅からスタート慈尊院を経て、丹生官省符神社を通り大門に着いたのが4時30分、梅雨明けのガンガン照りの中の山道は、熱く大汗をかいて行のようなものでした。梅雨明け十日と言います。これから、熱中症にならぬよう、水分と塩分に気をつけてお越し下さい。

##### 幹事報告

延 幹事

8月3日(火)例会は、8月7日(土)の家族会に変更しています。

8月17日(火)は、休会です。

##### ニコニコ箱

延 会員 先週本番の為休みました！すみません！ありがとうございました。橋本さんお世話になりました。

西山 会員 一昨日、高野山大門まで7時間30分かけて登山して来ました。皆様のご健勝もお祈りしました。

ロータリー財団国際親善奨学生 依田 悠介君紹介

西上 博 幸 顧問ロータリアン

2010 - 2011年度ロータリー財団国際親善奨学生候補者としてR I 第2660地区主催の3回のオリエンテーションを受講し、2010年6月26日にロータリー財団国際親善奨学生として地区より認証されました。大阪大学大学院在学中であり、言語学を専攻して

私達は他人(ひと)を思いやり 奉仕の理想のもと 地域社会へ貢献するよう 努めます

おります。留学先は、USAのペンシルバニア大学で、8月下旬に出発します。

留学先では国際親善大使としての自覚と役割を果たしてくれるものと期待しております。

本日は、出発前に彼の専攻している『理論言語学の過去・現在・未来』について卓話をさせていただきます。

## 卓 話

### 「理論言語学研究の過去・現在・未来」

2010-2011年度ロータリー財団国際親善奨学生

依田悠介君



#### 1. はじめに

言語学とは、言語を研究する学問であり、分析対象や、分析方法によって、さまざまに分類される。その中でも、ここでは、理論言語学という立場、特に形式的アプローチの生成文法理論という理論について概観したい。

生成文法理論が答えなければならない、研究課題は以下のようなものである。

- (1) a. 我々がある言語を母語として話すときに、どのような知識が我々の精神・脳にあることになるのか。
  - b. a.の知識はどのように獲得されるのか
  - c. その知識はどのように使用されるのか。
  - d. a~cを支える生物学的な基盤はなんであるか。
- 上の(1)にあげられるような問いに答えることにより、人間の言語が、人間のみ内在する特質であり、生得的に持つ能力であることが説明される。

#### 2. 理論言語学以前そして、理論言語学の出現

生成文法理論は、1950年代に、チョムスキーという言語学者から端を発する。それ以前の言語学といえば、多くの研究は、記述研究・比較言語学(祖語の再構築)・規範文法の制定などであった。当時は、人間言語の記述に興味を持つものが多かった。

しかし、生成文法は、20世紀の自然科学的手法を取り入れ、こころの学問として発展してきた。特に、生成文法理論は行動主義心理学の欠陥をいち早く見

抜き、数々の論争をその理論の初期の頃に繰り広げてきた。生成文法の指摘する行動主義の欠陥とは、以下のような欠陥である。

行動主義では、刺激を受けることにより、ある現象を習得する。しかしながら、人間言語の習得に関して、我々は、いままでに見たことが無い刺激に関しても、適切に対応することができる。つまり、言語を例に取ってみると、我々は、「窓をあく」のような、非文法的な文を一度もその文が非文法的であると習ったことが無いのにも関わらず、文法的ではないことを理解できるということであり、また、子供は、親から言語を教えられていないのにも関わらず、母語を完全に正しい形で習得することができるということである。

この事実が示すことは、行動主義的なアプローチが示す、「言語は後天的に習得される」という点が明らかに間違っており、生成文法が示す「人間は言語を習得する能力を先天的に持っており、その能力は、後天的に受けた刺激により活性化される」ということを支持している。

このような、初期の発展を踏まえ、現在生成文法理論は新たな方向へ進んでいる。その方向とは、言語の記述や、文法的な特徴を説明することが目的ではなく、ある言語Lを話すことができる話者の精神活動として、どのようなシステムが使われているのか。という点について解明しようとしている。

また、生成文法理論が自然科学的アプローチをとる限り、その原理は、複雑なものではなく、単純な現象の組み合わせが複雑さを生じさせていると考えられる。(このことは、科学一般に言われることである)

#### 3. 言語研究のこれから

現在まで、生成文法理論は言語学からのアプローチから研究されてきた。しかしながら、2000年代は人間がヒトという生物であり、その器官である脳に内在するところに対する研究がかつてよりさらに進んでいる。技術的にも、我々の脳の動きを観察することが可能となっているし、また、情報の蓄積も進んでいる。この先言語学は、こころの学問として、また、教育や、社会、そのほか多くの分野と係わり合いをもちながら進化していく可能性を秘めている。

#### 4. 参考文献

- 酒井 邦義(2002)『言語の脳科学』中公新書  
萩原 裕子(1998)『脳にいだむ言語学』岩波書店  
原口 庄輔ほか(2000)『ことばの仕組みをさぐる』研究社  
福井 直樹(2001)『自然科学としての言語学』大修館書店